

法華寺所藏 木造十一面觀音立像修復事業

光明宗法華寺 代表役員 門主 樋口 教香

＜修復前＞



奈良・法華寺

木造十一面觀音立像

総高 231.0cm (光背先端～丸框地付)

像高 191.1cm

奈良県

解説

両手に水瓶と錫杖を執って磐石上に立つ、奈良・長谷寺の本尊を模した長谷寺式の十一面観音像である。均整のとれたプロポーシオンや柔らかな質感の着衣の表現から体部は鎌倉時代（13世紀後半）、頭部は室町時代頃の補作とみられていた。また、像の表面に刀目を残し、彩色を施さない素地仕上げとする点から、病気の平癒や故人の追善などを願って真言を唱えながら1日で造り上げる「一日造立仏」の可能性があった。修理に際して頭部内の納入品から延宝4年（1676）の修理銘が見出され、頭部の制作時期が判明した。さらに体部の納入品のなかに「一日造立観音」とするした文書が見いだされ、中世の奈良を中心に展開した一日造立仏の貴重な遺品に加えられることとなった。

<修復後>



修復業者

公益財団法人美術院

修復内容

像本体の矧目の緩みは、一旦解体して頭部の落ち込みや目違いを修整し、漆・膠を用いて組み付けをおこなった。両手先・両足先も一旦解体し、両足の隙間をヒノキ材で補足したうえ漆・膠で接着した。右手首にかかる天衣は形状不適合のため別保存とし、ヒノキ材で新補した。着衣や像底の丸柄孔の欠失箇所もヒノキ材で補足した。なお、像内頭部および体部に確認された納入品のうち、頭部分は内容確認のうえ元の位置に納め、体部分は別途修理が必要と判断し、取り出したままとした。光背は彩色・漆箔の剥落止めをおこない、緩んだ柄に薄板を貼るなどして安定を図った。台座は解体せず、各所にみられる虫蝕部には木屎漆を充填した。腐蝕した釘はアクリル樹脂を用いて防錆処置をおこなった。

修 理 解 説 書

奈良市法華寺町
法 華 寺

種 類	名 称	員 数	備 考
彫 刻	木 造 十 一 面 観 音 立 像	1 軀	

像 高 1 9 1 . 1 cm

〔形 状〕

(本 軀)

髻頂上に仏面、髻および地髪部に頭上面九面を配し、地髪部正面に如来立像(光背・台座付き)を表す。天冠台(下より紐一条、連珠文、紐一条、列弁文、紐一条、花頭形)を表し、正面下部に垂飾を付ける。冠繪を付ける。髪は、髻は束目を表し、天冠台上の地髪は平彫り、天冠台下の地髪は正面・背面とも束目を表し毛筋彫り。鬢髪一条耳を渡る。白毫相を表す。耳朵環状、三道彫出。条帛・裙(一段折り返し)を著け、腰布を纏う。両肩に天衣を懸け、左は肘内でたるませ左前膊に懸け外側に垂下し、右は右手首内側でたるませ手首に懸け外側に垂下する。左手屈臂し、掌を内に五指を握り華瓶(未開敷蓮華・蓮葉・葉を差す)を執る。右手垂下し、掌を正面に向け、第一指を曲げ第二～五指の指先を下に向けて伸ばし、錫杖を執る。胸飾・臂釧・腕釧を付ける。腰をわずかに左に捻り、右足を緩めて立つ。

(光 背)

二重円光。頭光・身光・光脚・周縁部からなる。頭光中央に八葉蓮華を表し、花卉と圈帶部との間を切り透かす。圈帶部は内より紐二条、無文帯、紐一条、連珠文(連珠を細長く表す)、紐一条、列弁文。身光部は中央を透かし、内より無文帯、紐二条、無文帯、紐一条、連珠文(連珠を細長く表す)、紐一条、列弁文。光脚は花卉三弁、間弁を葉で表し、蕊付き。周縁部は十一方に雲(透彫)に乗る円相を配し、各円相に種子を表す。

(台 座)

方形台、反花、框座。

〔品質構造〕

(本 軀)

桧材、寄木造。玉眼。素地檀色、一部彩色。白毫および玉眼は水晶製。

頭軀別材製。頭部は両耳中央を通る線で前後二材矧ぎ。前面材は顎まで、後面材は首柄途中まで内割りを実施し(内割りは軀部に通じない)、頸部に左右二本の角柄を入れ前後材を繋ぐ。玉眼を嵌入し、玉眼押さえ木の上に納入品を納め、さらに上下二本・左右三本の棧木を渡し納入品を固定する。三道下で差首とする。髻・頂上仏面は各別材。頭上面は各一材製。如来立像は台座を含む本軀と光背を各一材製とする。天冠台

の上端に表す花頭形は各別材製。冠繪は木製、左三材製、右二材製。

軀幹部は両軀側を通る線で前後二材矧ぎ、内割りを施す。両腕は両肩・手首で各矧ぐ。条帛正面垂下部に一材を矧ぐ。天衣の両手内側にたるむ箇所は左右各一材製。両手外側に垂下する天衣は左右各別材製。両足先各一材製。

左手持物(華瓶)は左手先と共彫り、華瓶に差す未開敷蓮華・蓮葉・葉は各別材製。右手持物(錫杖)は別材製、錫杖頭部と柄を別に作る。

天冠台正面下部の垂飾は銅製鍍金の金具およびガラス玉を銅線で繋ぐ。胸飾は銅製鍍金、垂飾にガラス玉を交える。臂釧・腕釧は銅製鍍金。

本軀像底にあく丸柄穴に、方形台に立つ丸柄を差し込み立てる。

(光 背)

桧材、素地仕上げ。円相の地は彩色、種子は漆箔。

二重円相部・光脚を通し、大略縦三材矧ぎ。左端に一材を矧ぎ足す。背面に上下二本の横棧を打つ。周縁部は十一区に分かれ、各一材製。二重円相部と周縁部との繋ぎは、双方の背面に蟻溝を彫り、各二本の雇い柄を通す。

光脚下方に彫出する柄一本を、方形台の光背柄穴に差し込み立てる。

(台 座)

桧材。方形台は黒漆塗、反花・框座は摺漆仕上げ。

方形台は上下二段。上段は前後二材矧ぎで、台座天板とする。下段は前後の板材の間に左右材を挟む箱組とする。反花は四方各一材、方形台下端を囲うように框座に打ち付ける。框座は四方組付、前後を中棧一材で繋ぐ。

方形台中央に本軀と繋ぐ丸柄を立てる。丸柄下端は框座中棧中央に柄差しとする。

〔損傷状況〕

(本軀・光背・台座共通)

- 1) 全体に経年の塵埃・蜘蛛の巣が付着していた。

(本 軀)

- 1) 両肩および軀幹部の前後の矧ぎ目が緩み、隙間が生じていた。特に首柄が緩み、頭部が落ち込んで目違いを生じていた。
- 2) 両手首の矧ぎ目が緩み、右手第一指の中段から先が矧ぎ目から離れ脱落していた。また、左足先の矧ぎ目が離れ、両足先と裾との間に隙間があき、両足先の取り付けが不安定であった。
- 3) 像底の丸柄穴の正面が欠失し、柄が緩く、像の立ちが不安定であった。
- 4) 天冠台から下がる垂飾の左前の二片が亡失していた。
- 5) 冠繪の矧ぎ目の接着が離れ、脱落の危険があった。
- 6) 裳の折り返し二箇所と右裾の矧ぎ目付近に欠失がみられた。
- 7) 天衣遊離部の取り付けに緩みがみられ、後補に替わる箇所がみられた。また、左垂下天衣の地付付近に欠失がみられ、右垂下天衣が付根を残し亡失していた。
- 8) 足元付近等の各所に虫蝕穴がみられた。
- 9) 左手持物(華瓶)の蓮華・蓮葉・葉を差す穴が大きく、蓮華が傾いていた。
- 10) 右手持物(錫杖)の頭部左半分が近時修理時に接着されていたが、接合部に目違いがみられた。

11) 錫杖を執る右手に四箇所、釘穴があいていた。

(光 背)

- 1) 周縁部の円相に施す彩色・漆箔に浮き上がりがみられた。
- 2) 柄が緩く立ちが不安定で、建造物の後壁からテグスで繋ぎ安定をはかっていた。
- 3) 二重円相部と周縁部各区とを繋ぐ蟻柄が緩み、脱落の危険があった。
- 4) 周縁部の雲文透彫り部の先端四箇所が欠失していた。また、脱落片一片が別保存されていた。

(台 座)

- 1) 内部構造の確認が必要であった。
- 2) 方形台の材の矧ぎ目に隙間が生じており、台座各段の矧ぎ目の点検が必要であった。
- 3) 方形台を組み付ける釘頭が露出し、腐食する箇所があった。また、方形台の木口で材質の劣化する箇所がみられた。
- 4) 反花を留める釘が腐食し、組み付けが離れていた。
- 5) 框座・反花の各所に虫蝕がみられた。

〔修理仕様〕

*酸化エチレンと1,1,1,2テトラフルオロエタンの混合ガス(商品名エキューMS)の燻蒸による殺菌・殺虫処置を施した後、次の仕様を行った。

*修理に伴い、X線CTによる調査を行い(奈良国立博物館実施)、矧ぎ目に打たれる釘・鋸や像内の状況調査を行った。その結果、頭部・軀部の各内割り部に納入品が確認された。

(本軀・光背・台座共通)

- 1) 付着する塵埃・蜘蛛の巣は、筆・刷毛等で払い除去した。

(本 軀)

- 1) 矧ぎ目の緩みは、X線CT調査をふまえ、釘・鋸を抜いて一旦解体し、頭部の落ち込み・目違いを修整し、漆・膠を用いて組み付けを行った。なお、頭部・軀部の各内割り部に確認された納入品は、解体に伴って一旦取り出し、一部を開封し、検討・協議を行った。その結果、頭部納入品は元の位置に納めた。軀部納入品は別途修理が必要と判断され、取り出したままとした(特記事項1参照)。
- 2) 矧ぎ目の緩む両手・両足先は一旦解体し、両足先と裙との間の隙間を桧材で補足した上、漆・膠を用いて強固に取り付けた。脱落する右手第一指の中程から先は、エポキシ系樹脂(商品名ボンドクイック30、以下同じ)を用いて接合した。
- 3) 像底の丸柄穴の欠失箇所は、桧材で補足し(漆と膠を併用し接着)、台座上面の丸柄との隙間をなくし、像の安定をはかった。
- 4) 天冠台から下がる垂飾の亡失箇所は補足せず、そのままとした。
- 5) 矧ぎ目が緩む冠繪は一旦取り離し、冠繪の矧ぎ目をエポキシ系樹脂で接着し、本軀への接着は膠を用いて取り付けた。
- 6) 裳の折り返し二箇所と右裾矧ぎ目付近の欠失は、桧材で補足した。
- 7) 左垂下天衣は一旦取り離し、地付付近の欠失部を桧材で補足し(膠接着)、真鍮釘

で本軀に取り付けた。右手首に懸ける天衣(後補材)は形状不適合のため別保存とし、亡失する右垂下天衣とともに桧材で補足した。

- 8) 各所にみられる虫蝕穴は、ブチラール樹脂(商品名エスレックBM-2(Z) 溶剤ブチルアルコール+エチルアルコール、以下同じ)20%溶液に砥の粉と顔料を混合したものおよび木屎漆を充填し、補修した。
- 9) 左手持物(華瓶)の穴は桧材で埋木を施し、その中央に新たに穴を開け、蓮華・蓮葉・葉を差し入れ固定した(接着せず)。
- 10) 接合部に目違がみられた錫杖頭部は、一旦解体し、近時修理時の接着剤を除去し、目違いを正してエポキシ系樹脂で接合した。
- 11) 錫杖を執る右手にあく四箇所(釘穴)は、錫杖の柄の竹釘位置と対応する一箇所を残し、他の三箇所は桧材で埋木を行い、木屎漆で補修した。

(光 背)

- 1) 周縁部の円相に施す彩色・漆箔の浮き上がりは、ふのり2%水溶液に膠を5%添加したもので剥落止めを行った。
- 2) 柄が緩く立ちが不安定な状態は、台座の光背柄穴の正面側内面に桧の薄板を貼り、柄との隙間をなくし光背の立ちを安定させた。
- 3) 二重円相部と周縁部各区とを繋ぐ蟻柄の緩みは、蟻柄内面に薄板を貼り、安定をはかった。
- 4) 周縁部の雲文透彫り部の欠失箇所は桧材で補足した。別保存されていた脱落片一片は元の位置を調査し、左周縁部の元の位置にエポキシ系樹脂で接着した。

(台 座)

- 1) 内部構造の確認を行ったところ、框座に前後方向の中棧一本が入っており、構造上問題ないと判断し、そのままとした。
- 2) 台座各段の点検を行ったところ、方形台・框座については各矧ぎ目に鋸・釘が健全な状態で入っており、解体を要しない状態であった。方形台の矧ぎ目の隙間は桧の薄板を差し入れ、膠で接着し、接合強化を行った。また、反花については下記4の通り処置を行った。
- 3) 方形台の釘の腐食は、アクリル樹脂(商品名 パラロイド B72 溶剤メチルエチルケトン)10%溶液の塗布による防錆処置を行った。釘頭が露出する箇所は木屎漆で補修した。また、方形台の木口で材質が劣化する箇所はメチルセルロース(東京化成工業株式会社製 試薬M0293、以下同じ)1%水溶液にアクリル樹脂エマルジョン(商品名 プライマルAC2235、原液46%、以下同じ)原液を5%加えたもので材質強化を行い、木屎漆で補修した。
- 4) 反花の腐食する釘は撤去し、一旦取り離し、釘穴を桧材で補修した上、真鍮釘に打ち替え、元の位置に固定した。
- 5) 各所にみられる虫蝕部は、ブチラール樹脂20%溶液に砥の粉と顔料を混合したものおよび木屎漆を充填し、補修した。

以上の修理箇所は古色仕上げとし、修理記銘の銅札を台座框座中棧の下面に取り付けた。

〔特記事項〕

1) 頭部・軀部の各内割り部に、次の納入品が確認された。

○頭部前面材内割り部(修理記録写真No.36・38)

玉眼押さえ木の上部(白毫辺り)に納入品①、玉眼押さえ木の上に重ねるように納入品②を納め、さらに上下二本・左右三本の棧木を渡し固定する。

①蓋付き宝珠形容器(水晶製か)。舍利二粒を入れる。紙で全体を包み(一部剥離)、紙包に種子の墨書がある。

②卷子。布で包まれる。

○頭部後面材内割り部(修理記録写真No.37・38)

内割り底面(首柄半ば)に納入品③が脱落していた(頭部前面材から脱落したと思われる)。

③紙包。X線CT調査により、内部に舍利複数が確認できる。紙包に「□□山舍利」等の墨書がある。

納入品①②③については開封を行わず、頭部前面材に納め、脱落防止のため鍍金銅線で括り留めた。

○軀部内割り部(修理記録写真No.40～43)

内割り部のほぼ全体に、紙を巻いた状態の納入品が多数納められていた。

一部の開封を行ったところ、虫蝕等がみられ、別途調査・修理が必要なものであることが判明し、取り出したままとした。

2) 次の各所に墨書銘・墨描がみられた。

○頭部前面材の納入品を固定する棧木(上下方向の二本のうち左側)

判読できず(修理記録写真No.39)

○光背背面(修理記録写真No.19)

頭光背面に種子、周縁部の各円相の背面に宝珠の図を描く。

身光背面に墨書銘

「奉／修／補／櫻梅天神十一面観音 延寶五年[丁巳]二月日／
御本地堂後光基座 願主法華寺高慶／敬白」

○台座方形台上段材下面(修理記録写真No.17・18)

墨書銘

「櫻梅天神 御基座／(種子) □観音／御本地堂／
延寶五年[丁巳]二月日修造／法華寺御願主高慶」

延寶五年＝西暦1677年

〔施工場所〕 奈良国立博物館文化財保存修理所内

〔法 量〕 総 高 2 3 1 . 0 cm (光背先端～丸框地付)
 最大張 9 1 . 7 cm (光背周縁左端～同 右端)
 最大奥 7 6 . 1 cm (台座框前端～同 後端)

(単位：cm)

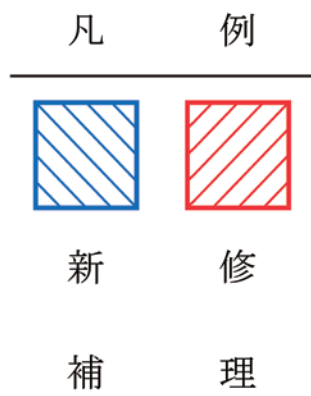
本 軀		光 背	
全 高	1 9 1 . 1	全 高	2 0 0 . 0
像 高	1 7 8 . 2	周縁張 最大	9 1 . 7
頂上 ～ 顎	2 8 . 3	頭 光 径	4 6 . 0
髻 高	1 6 . 0	頭光中心高	1 5 1 . 9
頂上仏高	1 1 . 4	身 光 径	6 0 . 5
髪 際 高	1 5 3 . 5	八 葉 部 径	3 4 . 3
髪際 ～ 顎	2 1 . 0	光脚 高	1 8 . 2
面 幅	1 6 . 9	光脚 張	4 7 . 1
耳 張	2 1 . 5	光脚 厚	2 . 3
面 奥	2 4 . 3	柄 高	7 . 4
臂 張	4 9 . 4	柄 幅	1 0 . 5
裾 張	3 2 . 5	柄 厚	1 . 7
天 衣 張	4 6 . 3	台 座	
足先開 内側	1 7 . 8	全 高	4 1 . 0
足先開 外側	3 1 . 5	台 座 高	3 1 . 0
胸 奥	2 3 . 5	方形台 高	2 3 . 3
腹 奥	2 5 . 0	方形台 幅	5 3 . 0
像底柄穴 径	8 . 9	方形台 奥	5 0 . 5
本軀最大張 (左冠繪先端～右天衣)	5 5 . 0	反花 高	5 . 0
		反花 幅	6 8 . 9
本軀最大奥 (水瓶～裾後端)	4 6 . 0	反花 奥	6 5 . 1
		框 高	7 . 9
持 物		框 幅	8 2 . 0
錫杖 高	1 6 8 . 2	框 奥	7 6 . 1
錫杖 張	1 1 . 1	丸柄 径	8 . 8
錫杖 厚	1 . 6	丸柄高(上端～方形台上面)	9 . 5
華瓶 高	4 7 . 6		
華瓶 張	8 . 1		
華瓶 奥	8 . 5		

京都市下京区七条通高倉
 東入ル材木町476-1
 公益財団法人 美 術 院

奈良県

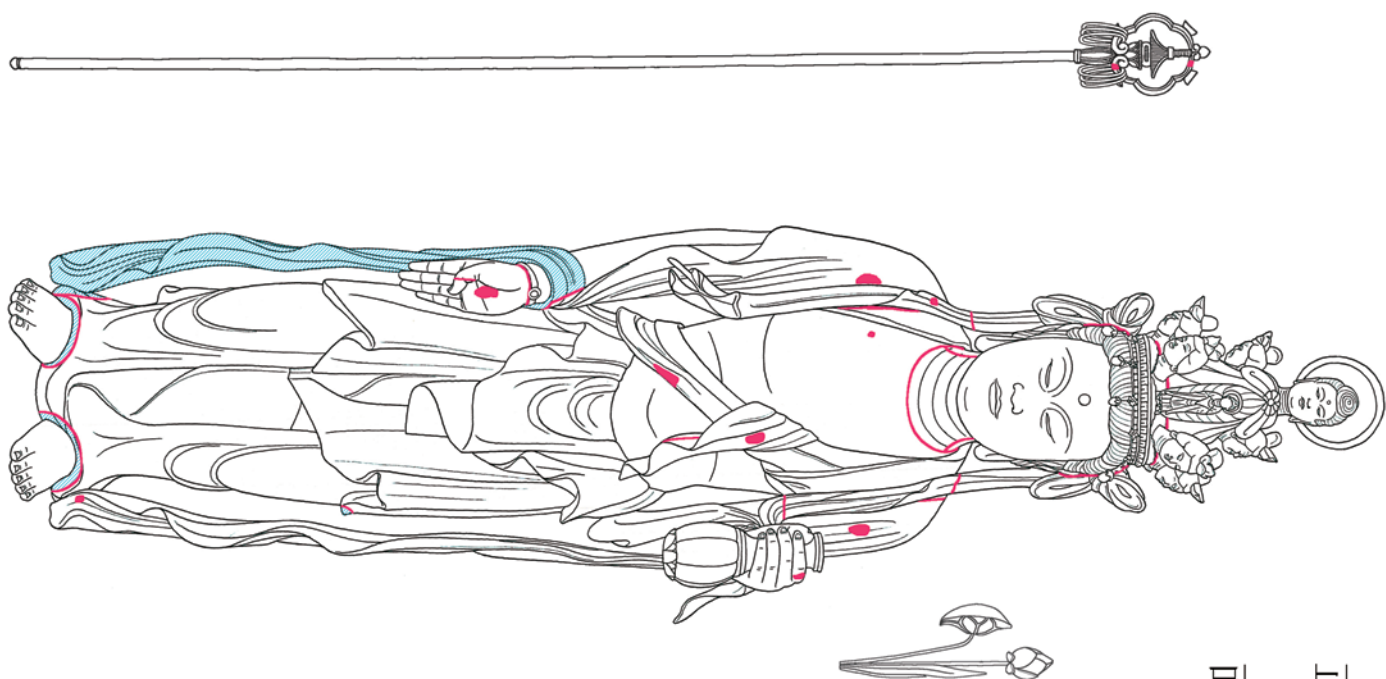
法華寺

木造十一面観音立像（1軀）修理図解

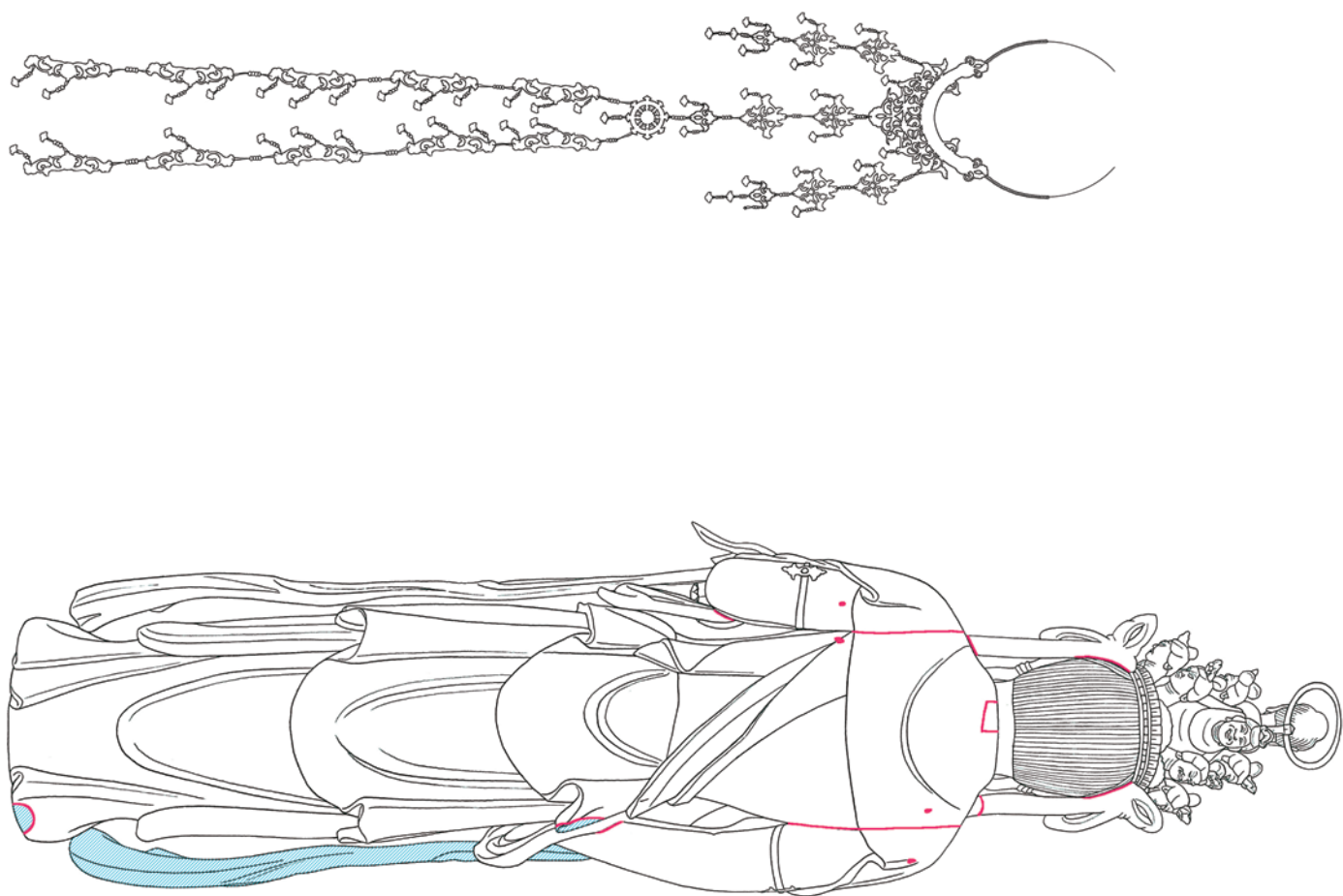


令和6年度

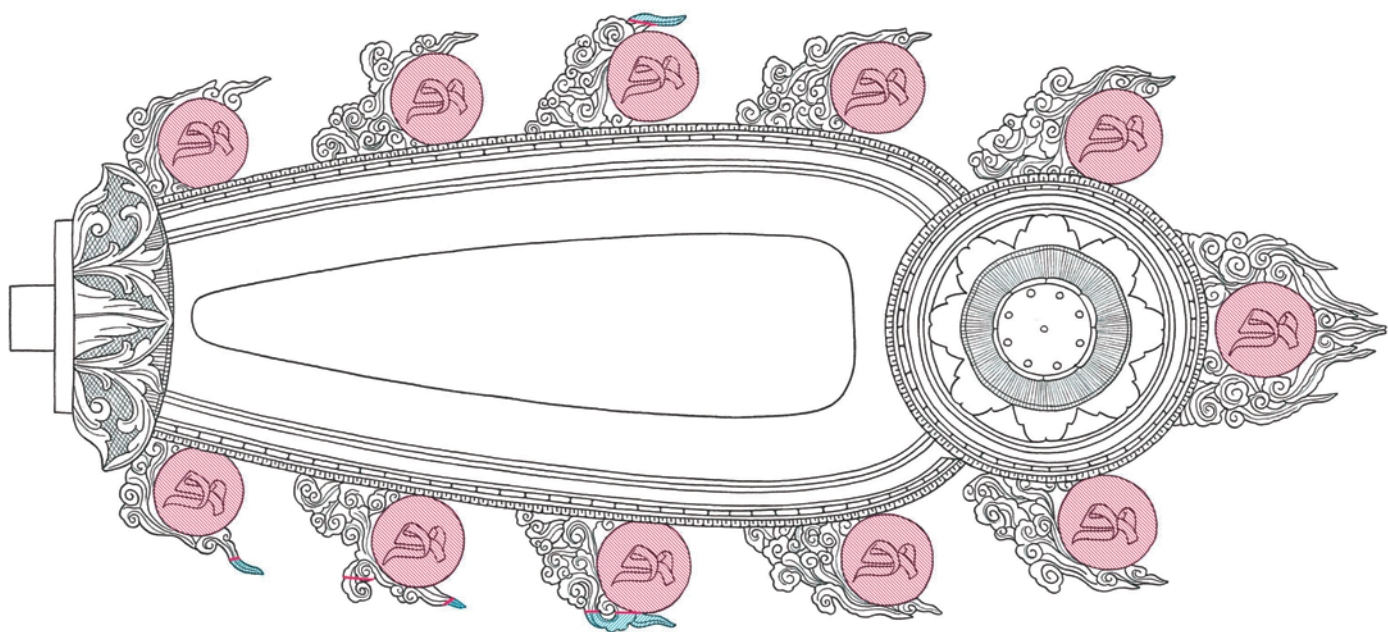
正面



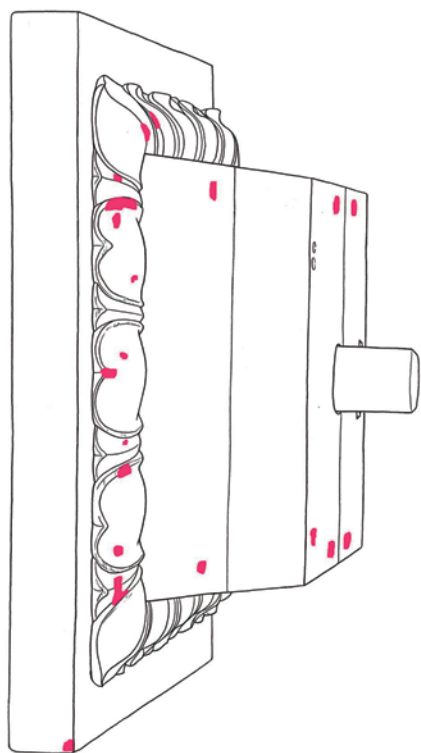
背面



光 背



台 座



修 理 記 録 写 真

木 造 十 一 面 観 音 立 像 1 軀

(令 和 6 年 度)

奈 良 県

法 華 寺



1、全影 完成



2、全影 修理前



4、正面 修理前



3、正面 完成



6、左側 修理前



5、左側 完成



8、右側 修理前



7、右側 完成



10、背面 修理前



9、背面 完成



11、台光背 完成



12、台光背 修理前



14、右斜め 完成



13、左斜め 完成



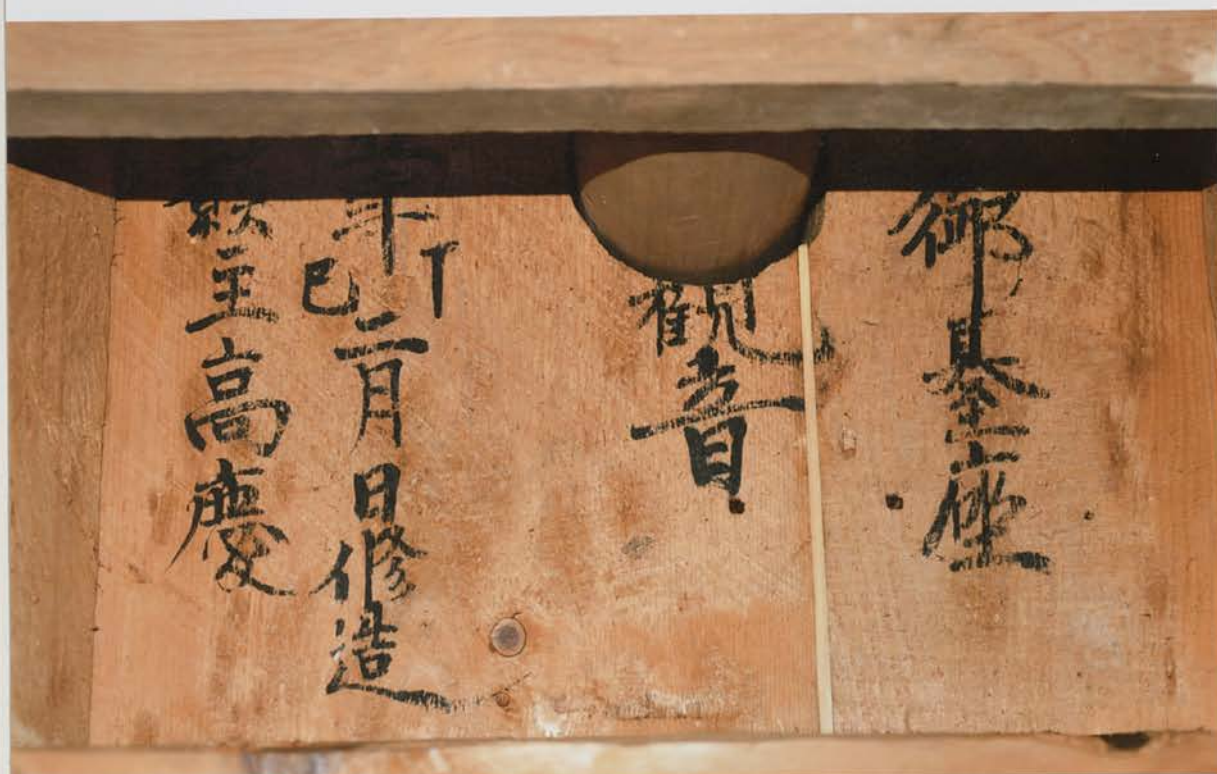
15、本 軀 解 体



16、本 軀 解 体



17、墨書銘(方形台上段材下面)



18、墨書銘(方形台上段材下面)

余白



19、墨書銘・墨描(光背背面)



22、像底丸柄穴 欠失状況



23、像底丸柄穴 欠失部補足後



20、両足先と裙の隙間 処置前



21、両足先と裙の隙間補足(古色前)



24、右裾の欠失部補足 (古色前)



25、右垂下天衣 補足作業



26、左手持物(華瓶) 差込み穴埋木 (古色前)



27、右手持物(錫杖) 目違い部解体



28、光背周縁部 彩色浮き上がり状況



29、光背周縁部 彩色剥落止め処置後



30、光背周縁部 欠失部補足 (古色前)



31、光背二重円相部 蟻柄補足 (古色前)



34、框座 虫蝕状況



35、框座 虫蝕部充填補修後



32、方形台木口 (左側) 処置前



33、方形台木口 材質強化・充填補修後



36、頭部前面材内剝り部 納入状況



37、頭部後面材内剝り部 納入状況



38、頭部納入品



39、頭部前面材棧木の墨書 (赤外線写真)



40、髀部内割り部 納入状況



41、髀部内割り部 納入状況 (髀幹部解体)



42、髀部納入品 開封状況



43、髀部納入品 開封状況